

思いは東北！

Vol.2 あれからの東北、もうすぐ3年

平成25年12月

平井和広

序章		
第1章	あれからの支援活動	P1
第2章	神戸から東北へ	P3
第3章	震災で活躍した人達	P5
第4章	いろいろな支援	P13
第5章	受援の達人になるため「『助けて』って言えますか」	P17
第6章	帰らぬ生活	P19
第7章	あれからの南三陸町	P22
第8章	あれからの大川小学校	P24
第9章	復興応援団	P27
第10章	外国からの応援団	P32
第11章	見えてきた災害医療	P34
第12章	減災とは	P39
最終章	今、何をすべきか	P41

序章

東日本大震災で被災されました方々にお見舞いと、お亡くなりになられました方々に心よりお悔やみ申し上げます。

平成23年3月11日14:46 三陸沖を震源地とする震度7(宮城県栗原市)の東日本大震災は、阪神・淡路大震災を凌ぐといっても過言でない未曾有の被害をもたらしました。

多くの人の幸せを根こそぎ持ち去り、不幸のドン底に陥れました。
あれからもう直ぐ3年、以前の生活に戻れない人達は数え切れません。

平成23年9月、10月に現地支援に出掛け、レポートを書きました。
レポートをとおして、震災を風化させない、少しでも復興にお役に立ちたいと願いました。

私とかかわりの有る、有った方々に広くお読みいただきました。
なかには3回目、4度目の現地支援に、協力を申し入れ頂けた方もいます。
私の活動は、些少なりとも復興にお役に立ったものと思います。

さて、今回のレポートは前回に書いてなかったこと、不足していたことを追加、整理するだけでなく、24年以降の現地の実情などを自分なりに考察したいと思えます。

そして、震災からもう直ぐ3年を迎える今、震災が過去のことと思う方たちに警鐘を鳴らすこと、震災支援に対する自らの姿勢を鼓舞することも目的としています。

人の考えには温度差がありますが、このレポートをお読みいただくときは、東北に思いを寄せてくださることをお願いいたします。

“そんなことは知っている”とおしかりの言葉も無く、今いちど、東北のことを想っていただければ幸いです。

第1章 あれからの支援活動

平成23年9月 南三陸町、10月の山元町現地支援後、支援の呼びかけを目的として11月にレポートを作成しました。

東北が雪の季節は冬眠し、レポートの作成、情報収集などを行い、雪解けには3度目の現地支援を計画していました。

また、社会貢献学会(東北福祉大学、工学院大学、神戸学院大学の3大学が中心となって構成、頭のアルファベットにより略称:TKK)主催の写真保存活動“あなたの思い出まもり隊”に参加しました。

津波で汚れた写真を洗浄、修復、データ変換を行う活動です。

活動には大学職員中心に、大学生、活動を知った一般人も参加します。

思い出の詰った写真をできるだけ多く、心を込めてお返ししたいとの思いでたくさんの人たちが活動します。

活動にお礼状を頂きます。これが活動の潤滑油となります。

ここにも眼に見えない絆があります。

そして、待ちに待った雪解けです。

24年5月ゴールデンウィークが終わった10日(金)、午後に職場の仲間2人と宮城県七ヶ浜町に向かったの出発です。

ワンボックスのレンタカーを提供していただき、母校同窓会から支援物資の土嚢袋を満載しています。

今回もまた、多くの人たちの物心の後ろ押しに恵まれ、東北に思いを届けることが出来ます。

七ヶ浜は仙台から北東、3面を海に囲まれ、「東北の湘南」と呼ばれます。町内には外国人の避暑地もあります。

11日早朝に到着、仮眠後、ボラセンで登録と支援物資の受け渡しを行います。ミーティング後は現場に移動、かつては畑であった場所で瓦礫、異物の除去を行います。1名はボラセン運営支援にボラセンに残ります。

現場では、大きいものは重機で片付けられており、スコップなどで小さなものを選別、除去します。

海に近く、風の強いなかの作業です。

翌12日は田んぼの瓦礫除去です。

前日と同じく大きいものは重機で片付けられ、人海戦術です。

ぬかるみに足を取られつつの作業です。

七ヶ浜の活動には、会社としてコカコーラの社員が、また基督教の団体が参加していました。

もちろん私達のように個人的なボランティアも参加しています。

山口から半年近く、車で寝泊りでの支援者もいます。

七ヶ浜支援後、年内にもう一度現地支援を行いたいと考えましたが、メンバーが集まりません。

東北まで1,000Km、一人では遠く、また一人で出かけるのは非効率です。

24年の現地支援は、七ヶ浜の1回に終わりました。

七ヶ浜から帰神後も幾度か“あなたの思い出まもり隊”に参加しましたが、平成24年8月24日の参加が最後となっています。

被災者からの受付を終了、洗浄、スキャナーでの取り込み作業も終了しています。

PCでの修復作業を残していると聞いています。

東北は震災後、2回目の冬を迎えます。
どうしても2年目の3月11日には、東北の大地にわが足を立てたいとの思いがつのりします。
平成23年10月に出かけた山元町支援を計画、職場で仲間1名を確保、甥を誘って3名での活動が具体化します。

25年3月8日(金)仕事を終えて山元町を目指します。
積雪の心配もあり、いろいろと行程を考えていましたが、ネットで確認し、何時も走る北陸道、磐越道から東北道を選択しました。
タイヤのこともあり、息子の軽ワンボックスを使用しました。
今回も友人から物資の提供を受け、土嚢袋などを届けることが出来ました。

山元町では、現地活動を行っているNPOの活動に参加します。
9日 畑、田んぼから除かれた瓦礫を基礎に、露天風呂作りをします。
土地は被災者から提供を受け、石、ブロックなどを敷詰めて土台を作ります。
被災者に無料で開放するとの事です。

翌10日は前日の続きと、露天風呂に併設するログハウスの材料をトラックから降ろします。
ログハウスの材料は、九州の団体から無償提供であり、運搬もボランティアです。
あいにくの暴風、砂埃で活動を早めに切り上げて、仮設住宅にチラシのポスティングに切り換えます。
チラシは復興支援コンサートのお知らせです。
四国から大型観光バスで数度、支援を重ねている団体との共同活動です。
町内にある数ヶ所の仮設住宅を廻ります。

いよいよ11日になります。
畑での瓦礫選別作業を行い、14時46分を迎えます。
町の防災無線が黙禱を促します。
一緒に作業をしていた団体が、準備をしていた風船を分けてくれました。
その団体と一列に整列し、海に向かって黙禱を捧げます。
震災で無くなった人たちの無念を慮りながら、自然と涙が滴り落ちます。
黙禱を終えると復興の願いを込めた風船を飛ばします。
大地には建物は点在するだけ、あっという間に空のかなたに小さくなっていきます。

山元町の鉄道は津波で壊滅、以前訪れた坂本駅はホームの土台のみとなっていました。
駅周辺の瓦礫は片付けられるものの、瓦礫を積み上げた山は相変わらず存在します。
山元町は砂地が多く、建物が崩壊、田畑がない分、風の強い日は砂塵が舞います。
護岸工事はしていましたが、住民の復興は進んでいないと感じて歯がゆさを覚えます。

現在の山元町のボラセンは復興支援活動を終え、生活支援活動のみ行っています。
復興支援活動は町内のNPO団体、数団体が継続しています。

予断ですが、山元町の特産はいちごです。
帰りの車は、ホワイトデーのためのいちごで甘い香りが立ち込めていました。

このように3度目、4度目の現地支援は終わりました。
5度目、6度目と続けたいと思いますし、そして何時かは観光で訪れることができる日を楽しみにしています。

第2章 神戸から東北へ

平成7年1月17日 5時46分 震度7の直下型地震、そう阪神・淡路大震災の発生です。

淡路島、神戸はこの震災で多くの犠牲を余儀なくされました。

阪神・淡路大震災と東日本大震災の比較などについては、前回のレポートで触れていますので今回は省略します。

今年も1月17日、神戸東遊園地で追悼式がありました。

地震発生時間、5時46分には黙禱を捧げます。

会場には竹灯籠を1.17に並べており、ご遺族達は亡くなられた家族への思いを胸にロウソクに灯を灯します。

私は、初めてこの追悼式に参加しました。

震災後18年、何故参加しなかったのだろう。

やはり、何時までも震災を引きずりたくない気持ちが有ったのかも知れません。

東遊園地には、「1.17希望の灯り」があります。

震災の5年後に建立され、同年1月17日5時46分に灯りが灯されました。

家族、友人を亡くされた人が、その思い出の灯りを消さないように、今も訪れています。

「1.17希望の灯り」から、全国各地に分灯されています。

もちろん、岩手県陸前高田市にも分灯された灯りが輝いています。

そして、3.11には東北の被災地に灯りが届けられます。

神戸と東北の絆の証しなのです。

神戸と東北の絆はこれだけではありません。

安藤良平 三等陸曹

小学生時の阪神・淡路第震災発生、12時間後に救出されました。

救援活動を行う自衛官に憧れ、高校卒業後に陸上自衛隊に入隊しました。

今は、あの阪神・淡路大震災で活躍した第三師団に所属しています。

そして、東日本大震災の発生に伴い、派遣されました。

「一人でも救いたい」意気込んでみたものの、任された任務はご遺体を清める辛いものでした。黄色いかばんを斜め掛けにしたご遺体にも遭遇しました。

小さなご遺体です。身を切られる思いだったでしょう。

でも、子供達が掲げる「自衛隊さん、ありがとう」のプラカードに勇気をもらい、任務を遂行します。

阪神・淡路で亡くなった友人、そして東北でご遺体となった小さな女の子をのように命を落とす子をもう出たくない…

そう思って訓練に励んでいます。

大西大地さん 大学生

家族と住んでいたマンションは崩壊、全員無事に脱出できたものの、祖母は体調を崩し3日後に亡くなりました。

避難した公園で不安な日々を過ごすなか、ボランティアに来ていた東京の大学生に遊んでもらったりした。

繋いでもらった手の大きさ、温かさを忘れていない。

東日本大震災、「あのお兄ちゃん」を思い出し、ボランティアを申し出た。

瓦礫の撤去、搬出作業のかたわら、得意の似顔絵でお年寄りを和ませます。

瓦礫の多さに圧倒されるも作業を進めます。

灘署 朝日巡查

阪神・淡路大震災で被災しました。

警察官の父親は出動したまま、帰宅しない日が続きます。

そんななか、自衛隊員等の支援を受け、何時かは人助けがしたい、父の背中を追って警察官になりました。

出向に際して、「不安もあるが、じっとしていられない。震災を経験した自分だから、被災者と語れる話もあると思う。東北の人々を元気付けたい。」という。

神戸市職員 森下武浩さん

宮城県名取市閑上(ゆりあげ)地区で土地区画整理事業を担当しています。

約2000世帯の面談、住民間の意見合成の難しさを痛感している。

神戸では地震・火災で家屋の損壊、東北は津波で倒壊しています。

東北では、元の場所に戻ることは困難です。

「阪神・淡路とは勝手が違う。早く新しい街の姿を示したい」

はるかのひまわり

加藤はるかさん(当時11歳)、震災で犠牲となり、自宅跡地に咲いたひまわりが復興のシンボル「はるかのひまわり」として広く知られています。

そのひまわりの種が全国に配られ、各地で咲き誇っています。

東北にもそのDNAを受け継ぐひまわりが咲き誇っています。

神戸大学工学部建築学科講師 藤岡智紀さん

造形家でもある藤岡さんは、溶接の実習で出た廃材を再利用したピザ窯のオブジェを製作し、25年10月14日、学生たちと福島県いわき市に設置した。

被災地の瓦礫をみて、ごみでしかないものでも、役に立つことをみせたかった。オブジェのピザ窯は、火を入れれば使えます。

障害者支援施設敷地で、ピザを焼き、利用者に振舞います。

今後は、岩手県石巻市の仮設商店街などを巡回し、出来たてのピザを配るイベントを検討しています。

そして、いつの日か、震災瓦礫で作った窯で、東北の海の幸、山の幸をてんこ盛りにしたピザを焼いて復興を支援したい…。

阪神・淡路大震災後18年、東日本大震災後2年半が経過しました。

悲しいかな震災は風化されようとしています。

神戸の地でも震災の事を話す機会は減り、ボランティア気運も低飛行となっています。

大切なことは震災を忘れない、苦しんでいる人に手を差し出し続けることだと思えます。

第3章 震災で活躍した人達

阪神・淡路大震災では、多くの方が活躍されました。

ボランティア元年と言われるほど、ボランティアという言葉が広く知られたのもこの震災がきっかけです。

あれから16年後の東日本大震災でも多くの人たちが活躍し、いろいろな形でのボランティアが行われました。

ボランティアだけではなく、自衛隊、アメリカ軍、警察…

今まで以上、以前と異なった形での支援もあり、本章でお話したいと思います。

○自衛隊

・統合任務部隊とその指揮官

2006年の自衛隊法改正により、平時より3自衛隊(陸上自衛隊、海上自衛隊、航空自衛隊)の統一的運用が行えるようになりました。

2つ以上の軍種(自衛隊)によって構成された部隊は“統合任務部隊:JTF”と呼ばれ、統合幕僚長の下に単一の司令部・指揮官でもって編成されます。

東日本大震災では、3月14日防衛大臣命令により災統合任務部隊が編成されました。JTF-TH(災統合任務部隊 東北)の指揮官には、陸上自衛隊東北方面総監の君塚栄治陸将が当たります。

統合任務部隊は、かつてない10万人規模、延べ1000万人以上の投入により、救助、捜索、瓦礫の撤去、支援物資の運搬、避難所の支援とありとあらゆる活動を行いました。

福島原発でも、中央特殊武器防護隊を中心として対応を行っています。

君塚陸将は隊員に対して“先憂後楽”と訓示します。

“先憂後楽”とは、北宋の忠臣 范仲淹(はんちゅうえん)が為政者の心得を述べた言葉で、「転じて、先に苦勞・苦難を体験した者は、後に安楽になれる」ということ。

陸将は、平成23年7月の日本記者クラブでこう語っています。

「被災者には温かい給食、自分達は缶メン」

そして隊員たちは、被災者にはお風呂を、自分達はウェットティッシュで身体を拭きます。

被災者に十分な支援をする、自分達は苦勞をするが、被災者の感謝が自分達の幸せであるとの姿勢です。

* 缶メン:自衛隊用の缶詰のご飯

また、陸将はこうも言っています。

「隊員には『一生懸命考え、正しいと思ったことをやろう。その善し悪しは、後世の判断を甘んじて受けよう』 隊員の働きに誇りを持っています。」

・自衛隊の装備

災害時の輸送に使えるヘリは500機以上有しており、世界最大規模です。

消防、警察、自治体のヘリは小型が主流ですが、自衛隊のヘリは中型、大型であり、一度に多くの物資や被災者を運ぶことができます。

後で触れますがDMAT(災害派遣医療チーム)も被災地に運んでいます。

施設大隊(工兵)は道路や橋を修理する技術、装備を備えており、のみならず自前の架橋システムにより通行を可能に出来ます。

この架橋システムは、瞬時に分断された道路などを繋ぎ、被災者の避難、物資の運搬が行えます。

ヘリ空母や輸送艦は物資の運搬、被災者の収容に用いられます。
物資を届けたヘリは、帰りに被災者を艦艇に運べます。
そして、これら一部の艦艇には外科用の手術室から、医療施設を有しており、
傷病者の治療を行えます。

医療装備については、陸上自衛隊には野外手術システム10セットが
存在します。
トラック4台で、手術準備室、手術室、滅菌室と資材運搬車で構成され、
それぞれ4台は渡り廊下で結合できるようになっています。
もちろん、この野外手術システムもヘリや輸送機で展開できます。

被災者に喜ばれるのは、お風呂と洗濯施設の提供です。
毎日1200人が利用できる「野外入浴セット2型」と一度に40着の作業着が
洗濯できる「洗濯セット2型」は、被災者の生活の質の維持に必要な装備です。
阪神・淡路大震災でも、お風呂セットは大活躍です。
いずれの震災も寒い時期であり、避難所でも暖房が十分でないなか、
お風呂セットは身体を温めるだけでなく、心も温めてくれました。
そして、被災者は支援してくれる自衛隊員の心にも温められました。

・今回の震災で見えた不備
自衛隊の輸送ヘリは世界最大規模だと言いました。
しかし、輸送艦艇という面では、そうではありません。
今回の震災で、多くの艦艇は物資輸送や行方不明者の捜索にあたり、
車両や人員を輸送する艦艇は米軍や民間のフェリーがそれに充当されました。
民間のフェリーでは常に使えるわけでも無く、乗船等にも制限があります。
自衛隊は専守防衛という考えであり、これが輸送能力に欠ける原因かと
思います。

東京電力福島第一原子力発電事故でも、無人ゆえに人的放射能の影響を
受けない無人偵察機による米軍の支援を受けました。
震災後、日本でも無人偵察機購入に対する予算措置はとられました。

・第22普通科連隊
第6師団下において、多賀城駐屯地に駐屯する。
その警備担任区域は多賀城市、塩竈市、東松島市、名取市、七ヶ浜町、
南三陸町、女川町、宮城野区……
警備担任区域の海岸線は津波の被害により、壊滅的打撃を受けました。

地震発生、災害支援の準備をしている最中、津波により車両の多くは
水没してしまいました。
当時の連隊長 國友 昭一等陸佐は、独断で避難住民に施設の
開放と隊員に避難住民の支援を指示しました。
彼は言います、「自衛隊は最後までこの国を守る。」

有馬二等陸曹は津波に流され、一旦は民家に辿り着きます。
しかし、津波に流される人を見て、危険をかえりみず18人を救助したという
勇者です。

・霞目駐屯地
仙台市若林区にあります。東北方面航空隊等が駐屯します。
駐屯地は津波による被害は無く、ヘリ部隊が被災者の救出、負傷者の対応に
活躍しました。
ヘリパイロットの斎藤三等陸佐 一人でも救いたいと操縦桿を握ります。
中野小学校屋上から550人を救助します。

・第50普通科連隊

第14旅団(高知県)下、災害派遣で宮城県で活躍します。
大川小学校で行方不明者の搜索任務にあたります。

櫻木陸士長 「日本と思えない」

中隊長の宇郷三等陸佐 遺体を見たことの無い若い隊員のメンタルが心配と言いながらも、「思い出を掘り起こせ！」と鼓舞する。

木谷陸士長 足が見える、人形か？、白い足に触ってみた、人の柔らかさ、人だ！、少女は眠っているように穏やかだ。

搜索活動をする隊員に少女が手紙を渡しました。

絵とともに、「じえいたいさん、ありがとう」

隊員は疲れを忘れ、悲しみを押し殺して搜索します。今の自分にできることは搜索活動、ご遺族に思い出を届けたい！

・掃海艇「つきしま」

海上自衛隊阪神基地隊所属、排水量490トン

北海道南西沖地震、阪神・淡路大震災、そして東日本大震災と国内各地の災害派遣の任務にあたり、活躍しました。

物資の輸送、行方不明者の搜索に活躍しましたが、老朽化が進み、23年度末で引退が決まりました。

お疲れ様でした、敬礼！

・ブルーインパルス

航空自衛隊松島基地に所属、各種イベント等でアクロバット飛行を披露します。

杉山空将補は、津波から飛行機を避難させる時間が無いものと決断、全員避難を指示した。

飛行機の避難、隊員の生命とを考えた上での判断です。

結果、松島基地の航空機だけの被害額は2300億円といわれる。

ブルーインパルスの9機のうち、1機は使用不能となったが、2機は定期修理で松島基地を離れ、6機は九州新幹線開業イベントで芦屋基地にいて難を逃れた。

TBSドラマ「空と飛ぶ広報室」をご存知ですか。

新垣結衣と綾野剛が主演していました。

ドラマの最終回です、ブルーインパルスの話がありました。

隊員は思っています、

「勇気付けるとはおこがましいが、できることは飛ぶこと」

ブルーインパルスが松島の、東北の空を飛ぶ

多くの自衛官が災害派遣で活躍しました。

福島原発事故では、中央即応集団の隊員多くが、放射能被爆をかえりみず出動を志願しました。

化学防護車で放射線量の測定、放水車で冷却作業に携わりました。

第一空挺団 陸上自衛隊最強の部隊です。

斉藤一等陸尉 福島で搜索作業にあたります。

最初に発見したのが1歳の子、「悲しいが家族の元へ戻してあげれる。」

○ともだち作戦

米4軍(陸軍、海軍、空軍、海兵隊)の震災支援作戦である。

司令部を横田空軍基地におき、人員約2万人、艦船20隻、航空機約160機が投入された。

ヘリで孤立した被災者の救助、揚陸艇で孤立した島への物資輸送、もちろん行方不明者の捜索も行われました。

日本に無い、大型空母ロナルドレーガンも投入され、その威力は絶大なるものでした。

韓国との合同演習に向かっていた同艦を宮城県沖に向かわせ、演習用に準備していた物資は全て災害支援に提供されました。

米軍は、インド洋津波、パキスタン地震、ジャワ中部地震等において、災害派遣実績を有しており、自衛隊とも組んでの実績もありました。

沖縄からも第3海兵遠征軍が投入されました。

司令官のケネス・J・グラック中將は、自らの部下を「沖縄マリーン」と呼びます。

沖縄に勤務することを誇りとし、日本と米国の友好に貢献すると信じてのことです。沖縄マリーンは、あらゆる米軍の災害支援に派遣されます。

平成25年3月5日 沖縄米軍のキャンプハンセンで、ヘリの墜落事故があり、乗員1名が死亡しました。

第33救難中隊の救難ヘリであり、東日本大震災では南三陸町、約200人が屋上に避難していた介護施設での、物資提供、救助作業に従事した機であった。

あらためて、震災支援に感謝するとともに、心より哀悼の意を表します。

自衛隊のところで触れていますが「無人偵察機」のことです。

米空軍の最新鋭無人偵察機グローバルホークを、翌日にはグアムから福島上空に急派、5月11日までの2ヶ月間で4400枚以上の写真を無償提供してくれました。

米軍だけではありません。

自衛隊と訓練実績のある豪州、韓国軍も支援をしてくれました。

豪州の捜索・救援タスクフォースが捜査犬を伴い大型輸送機C17で、米軍横田基地に着陸したのは震災後3日後の3月14日の早朝。

このチームは国際的な災害救援で急派される精鋭チームです。

さらに、福島第一原発事故対応で使用する遠隔操作高圧放水砲の提供もありました。

韓国軍の反応も素早いものでした。

11日夕に関係閣僚会議を招集、12日には先遣隊を派遣、救援物資の提供、救助救難活動と過去最大規模の支援を行ってくれました。

中国では艦船の派遣を打診してきましたが、お断りしたと聞きます。

ロシアの情報収集機等に対して、空自がスクランブルを掛けることもありました。

非常時においても、非同盟国との共同作戦では手の内を読まれるために敬遠、手の内を読みに来ようとしています。

非常時においても駆け引きがありました。

○警察

東日本大震災には全国の警察から支援がありました。

救助・救出活動、生活支援、行方不明者の捜索、治安維持……

兵庫県でも阪神・淡路大震災では、全国から810人の出向を受けました。
今回の東日本大震災では、全国から750人の出向が予定されました。
兵庫県では28人の警察官が宮城県に出向します。
阪神・淡路大震災の恩返し、県警の誇りを持って職務にまい進を誓います。(24.1.31)

阪神・淡路大震災でも、全国から兵庫県警に転籍を申し出た警察官が多かったです。
今回の東日本大震災でも、応援組から転籍を申し出た警察官23名がいます。
平成25年4月現在

警視庁本所署⇒宮城県警石巻署 阿部雄太巡查長
石巻市出身であり、24年2月から派遣されています。
両親、祖父母は無事であったが、変わり果てた故郷を目の当たりにし、悔しさで警察官の自分に来ること、故郷に恩返しをしたい、被災者に寄り添いたいと転籍を願い出た。
日々のパトロールで住民の声を聞き、行政に伝えることが大切という。

震災を2年経過した24年3月、行方不明者は3100名を超えていた。
平成24年3月11日、福島県南相馬市の海岸近くで警察官による捜索が行なわれました。
同年6月11日、宮城、岩手両県で警察、海上保安庁を中心とした捜索が行なわれました。

宮城海上保安部では、毎月11日を集中捜索の日としています。
宮城県警でも、週2日程度、10～15名体制で海岸線を中心として捜索を継続するが、23年9月以降、骨の一部を除き、発見に至ったケースはない。

24年6月11日 釜石市の中学校近くの沼地
60人以上が横一列に並び、手がかりを求めて汚泥をシャベルで掘り返した。
岩手県 熊谷・釜石警察署長は言います。
「一人でも多く家族の元に帰せるよう、捜索は続けたい。」

身元不明遺体の身元判明に活躍した警察官がいます。
岩手、宮城、福島で身元不明遺体は232人いました。(23.8.28現在)
津波で傷んだご遺体、家族でも判明しづらい例が多々在りました。

宮城県警身元不明・行方不明者捜査班嘱託 安部秀一さん
警察人生のうち31年を鑑識課一筋で勤め上げ、2010年退職後、後進の指導にあたっていた。

ご遺体の数の多さに圧倒され、身元確認作業に追われながら、「何が出来るのだろう」、自問自答のすえ、「自分にできることは似顔絵描き」「家族が見つかるきっかけになれば」
鑑識経験から、生前のお顔がどんなふうだったのか、すぐ頭に浮かびます。
しかし、通常の捜査では1日に1枚の作成が限度だが、1日2枚を描き続けます。
ほとんど休みもとらず、描き続けます。
「警察人生の最後で、自分の力を被災者のために使えた。」
阿部さんの思いは後輩に引き継がれます。

岩手県警鑑識課にも、似顔絵から身元を判明させた警察官がいます。
渡辺花子巡查、大槌町の田中恵美子さん(当時56歳)を弟の正彦さんが少なくとも遺体を2回以上確認するも判明せず、目の開いた似顔絵により姉と確認しました。
「何度も写真を見て想像した、お役に立ててうれしい。」と渡辺は微笑む。

阪神・淡路でも全国から多くの警察官が応援をしてくれました。
そして、被災者と寄り添いたいと完全転籍をしてくれた警察官がいます。
東北では今、約700人の警察官が応援、治安維持、捜索活動に従事しています。
その中で23人が完全転籍を申し出ました。
故郷に恩返しをしたい、被災者に寄り添いたい……

○海上保安庁

自衛隊、警察や消防に比べて、その活動が報道されることが少なく印象が薄いかもしれません。

勢力規模が小さいのが、原因かと思われます。
しかし、海の警備、救難のプロとしての能力は秀でているものと思います。
伊藤英明の「海猿」や尖閣問題で、存在はよく知られています。

震災発生に伴い、巡視船艇54隻、航空機19機を東北太平洋側に集結させました。
3県の現有勢力は被害を受け、応援なくては活動はままなりません。

遺体の捜索、孤立した島・座礁船からの救助、漂流船・家屋の調査、漂流船のえい航、臨海部で発生した火災の消火活動などを行っています。

海上保安庁は、第二管区海上保安本部に、全国からの勢力を集中させ、青森船隊、岩手船隊、宮城船隊、福島船隊に編成し、効率の良い活動を目指します。

潜水土、機動救難士、特殊救難隊は、海にもぐり、行方不明者の捜索、航行に障害となる瓦礫などの除去を行います。
ヘリからの捜索、救助も行います。

機動防除隊は、臨海部の危険物貯蔵施設や危険物積載船が被害を受け、危険物などが流出したため、その防除について指導、助言を行いました。
福島第一原発事故では、近辺捜索活動に際し、放射線量の測定などの放射線管理を行いました。

巡視船「ざおう」主任機関士 藤田伸樹

10月までにざおうの潜水班の潜水捜索は164回を数え、水没車両の捜索135台、震災直後の水温は例年より低く、水面の木材には釘が突き出ている。
水中の残骸も鋭利な凶器の上、捜索中の余震もあり危険と隣り合わせです。
ただ、行方不明者の帰りを待っている人のためにも、精一杯、潜水作業を行う。
ご遺体、遺品を返すことによって、癒される心情もある事を後輩に伝えたい。

第五管区海上保安本部関西空港海上保安航空基地 機動救難士 村上彰宏
関西空港から羽田空港、さらに石巻港の災害現場に、
漂流船からの救助、建物屋上からの救助……
被害の悲惨さを目の当たりにし、自分たちの活動はきっと復興につながると信じている。

○全国の自治体

東北では復興の中心となるべき市町村職員が、多くその職務に殉じて亡くなりました。
海岸部の被災地には、県内の内陸部の市町村から応援職員が活躍しました。
ただ、これだけでは復興は進みません。
全国の市町村から復興を担うため、多くの職員が出向等により活動しています。

北海道深川市⇒宮城県気仙沼市 佐藤泰格さん
法律により、遺跡の発掘調査が終わらないと、住宅地等の整地ができない。
復興のためにも自分のできることをしよう。

横浜市⇒仙台市 小倉有美子さん
一級建築士の資格を持ち、被災地の復興に生かしたいと派遣を希望した。
住宅地の造成、早く住民が安心して暮らせるようにしたい。

愛知県みよし市⇒福島県いわき市 横田竜一さん
風評被害対策として、ホームページで放射線数値を発信している。
学生時代は箱根駅伝の選手、「未来へとたすきをつなぐ思いで取り組んでいます」

愛媛県松山市⇒宮城県東松島市 永野 哲さん
仙台の知人が被災したこともあり、出向を希望しました。
土地区画整理事業を担当します。
「住民の思いを生かした街づくりを進めていきたい」

福岡県久留米市⇒福島県郡山市 遠藤修平さん
除染業者の公募、汚染土の仮置き場について住民に同意を求めたりしています。
放射能を気にする親の気持ちがわかる。
除染で線量を下げ、市民が誇りと愛着を持てる街にしたい。

広島市⇒宮城県石巻市 岡田誠司さん
15年前から震災ボランティアを行っています。
今回も希望し、家屋の解体等を担当しています。
「被災者から『来てくれてありがとう』と声掛けられた時は励みになった。少しでも復興のお手伝いが出来たらという気持ちです」

秋田県大仙市⇒岩手県宮古市 石川喬太さん
住民の高台移転用地の契約業務に従事しています。
仮設住民が恒常住宅、安住の地に落ち着くことが、従前の生活を取り戻す
第一歩だと思っています。
「自分のしたことが、役立っているのか確かめたいので、派遣期間延長も考えている」

全国からの自治体職員にも震災関連死をされた方がいます。
なれない仕事、家族を離れての生活、自分のしていることの成果が確認できない..

宝塚市職員(男性)は岩手県大槌町に派遣され、土地区画整理事業に従事。
平成25年3月、宿舍の仮設住宅で自殺しているのが確認されました。
遺書と見られる手紙には、「皆様ありがとうございます。大槌町は素晴らしい町です。
大槌町がんばれ!」とあります。

中川宝塚市長は、「殉死というようなもの、二度と起こさないように良く話合いたい」

○消防団員

ふだん仕事を持ち、いざという時は消防職員とともに活動する非常勤特別職の
地方公務員です。
全国で約87万9千人がいます。

東北では多くの消防団員が活躍した影に、その責任感から職務に殉じた団員が
多くいます。

宮城県東松島市の分団長 櫻井さん(建築業)
消防車で避難を呼びかけます、津波が押し寄せるのを確認、漁協の2階に
避難します。
津波に流される2人を、窓から身を乗り出して救出します。
団員2名が水門閉鎖後、避難誘導中に残っているところを津波にのまれ、
亡くなりました。「今でも、言葉に表せないほど悔しい」と肩をおとす。

退避などの安全管理マニュアルの不備、情報共有手段の不備が悲劇を生みました。
1組織で幾つもの水門閉鎖を行うことにより、避難が遅れます。
3メートルの津波予想が10メートル以上になったことを知らなかった….

そんななか、沿岸自治体で15メートルの津波にさらされ、100棟以上が全半壊しながら、住民、消防団員、誰一人として犠牲者を出さなかったのが、岩手県洋野町です。

「チリ地震」で、ひとつの組織が水門2～3基を担当、全29基を閉めるのに29分かかった。

三陸沖の津波では間に合わないとの判断により、常時閉鎖の水門を増やし、緊急時の閉鎖は9基にした結果、今回は12分で完了した。

そして、閉鎖後も見張りに残る慣習例も、すぐ高台に逃げるように改めた。

消防団が率先して非難する姿に追随し、住民も非難するであろうとの判断です。

今回、家を出遅れた人々も、避難する団員の後を追ひ、ねらいの正しさが実証されました。

高知県香南市は、消防団マニュアルを作り、冒頭で「自分の命、家族の命を守る」ことが最優先と記した。

市消防幹部が被災地で、「悲劇を繰り返さないで欲しい」と、泣いて訴えられたことがきっかけという。

国は23年秋、携帯型無線機などの設備購入への補助金を予算化した。
携帯電話が不通になった被災地で、連絡方法を確保するためである。

第4章 いろいろな支援

阪神・淡路大震災では、100万人のボランティアが活動し、「ボランティア元年」と呼ばれました。

東北でも多くのボランティアが、いろいろな形で支援しました。

○納棺師

皆さんは、「納棺師」をご存知ですか。

本木雅弘さんの映画で知られるようになりました。

ご遺体を化粧、安らかなお顔にしてさしあげます。

* 私は病院職員で、亡くなられた患者さんにお化粧をしたりすることを「エンゼルケア」と言います。

北上市の笹原留似子さん、納棺師であり、遺族に寄り添って悲しみを癒す「グリーンケア」活動を広げようとしていた時に、地震が起きました。

仲間とともに被災地へ、車中泊をしながら10日間で約150人を見送った。

津波で傷んだご遺体は、通常20分で化粧できるのが1時間を要します。

家族を失い、自らを責める方も居られます。

一緒にお化粧をしながら、色々なお話を聞きます。

家族に寄り添い、元気づけたいと言います。

そして、「自らも勇気を頂きます」とも言います。

○スコップ団

団長の平さんは震災直後、燃料運搬で被災地に入りました。

そして、震災で亡くなった友人宅の汚泥を掻き出します。

友人3人で始めた活動に、連絡網代わりのブログで集合場所、時間をみた見知らぬ人たちが集まり加わります。

この先、住まないでも思い出の詰った家を、少しでも綺麗にしてあげたい。

スコップを手に100人が集まることがあります。

家財の搬出、高圧洗浄機での洗浄…

泥をかぶった思い出を綺麗にしていきます。

スコップ団にルールはありません。

あるとすれば、「必要としている人がいれば、実行する」ことだと言います。

平さんは、「1年活動し、誰も怪我無く作業できて幸いです。しかし、泥を掻き出しても、何かを取り戻せたわけではない。世界を変えられたわけでもないが、一人ひとりの世界は確かに変わって、笑顔が生まれることは感じる。」と。

○寄付元年

インターネットサイト「ヤフー」は、震災当日の深夜、ネットで被災地に募金できる特設サイトを開設しました。

そして、被災地支援情報がホームページでもっとも目を引く「ブラインドパネル」と呼ばれる位置の真下に表示します。

募金額は1年で、13億円を超えました。

募金活動を統括する宮内さんは、「『支援したい』と考えたとき、真っ先に思い浮かぶのが募金なんだと強く感じた」という。

日本赤十字社に寄せられた義捐金は、約3400億円、阪神時の1.8倍に上る。
阪神では「ボランティア元年」と呼ばれますが、東日本は「寄付元年」と呼ばれます。

自己負担の無い募金活動もあります。
ネット上で1回クリックすると、スポンサー企業が利用者の代わりに被災地に1円の寄付を送るシステムがあります。
「クリック募金」と呼ばれます。

欧米に比べて寄付文化の根付いていない日本では、「タイガーマスク現象」のように善行をひけらかさない独特の美学がある。
だからこそ、ネットを介した募金、寄付は日本人気質に合うと、IT運営会社社長はいう。

政府も家電エコポイントが「1ポイント＝1円」で被災地寄付できる募金システムを作るとともに、被災地支援を行うNPOで国認定団体に活動資金を寄付すれば、所得税を減税するという。

○ITボランティア元年

阪神・淡路大震災時には無いITによるボランティア支援があります。

インターネットサイト「グーグル」では、震災発生後2時間で、被災者の安否情報を流す「パーソナルファインダー」を開設した。

さらに避難所などからの情報入手の手段も確立したが、マンパワー不足に陥る。
スタッフが「ツイッター」で呼びかけると、多くのボランティアが自宅のPCで作業に加わってくれました。

500人以上のボランティアで、最大67万人分の巨大な避難者データベースを作りあげることが出来たのです。

ITは何処にいても、『何かをしたい』と思う人達の力を融合させ、大きな支援活動を生み出します。

横浜市のIT技術者 石野正剛さん

福島原発事故にかかる情報サイト「風@福島原発」を無償提供します。
放射線におびえる人たちに、情報を提供支援します。

IT技術者達は、被災地支援団体「ハックフォーージャパン」を結成します。
全国から1000人が名乗りをあげ、100点以上のアプリやシステムの提供を行います。

石野さんもそのうちの一人です。

第1章で自らの支援活動をお話しました。

「あなたの思い出まもり隊」は写真の洗浄、スキャナーで読み込み後、ソフトを使って傷などの修復を行います。

読み込んだ写真をネットを介して、自宅のPCで修復活動されるボランティアがいます。

写真の数は被災者の思い出だけ多くあり、その作業はボランティアに支えられました。

このようにITを利用した様々な支援から、「ITボランティア元年」とも呼ばれるでしょう。

○潜水活動ボランティア

警察、消防、海上保安庁などの潜水活動のほかに、ボランティアによる活動もあります。

「DSP災害プロジェクト」宮城県栗原市に拠点を置き、23年6月から石巻市、東松島市などの沿岸部で潜水活動を行っています。

東松島市出身の門馬宏明さんは、「不明者の多くはまだ海の中にいる。」
「一日も早く、家族の元に返してあげたい」と、東京から三陸に通う。

関西、九州や海外からも計80人が、潜水活動も1000回を超えています。

潜水機材、交通費などの多くはボランティアの持ち出し、ダイバーは手弁当で潜ってくれます。

確認したご遺体は100体以上、遺族との対面に立会い、「不明者が家族にとって大切な存在だった」と実感する。

メンバーの大森裕彦さん

宮城県の内陸部にある登米市から活動に参加します。

「レジャーで潜るのと違って、楽しいものでないが、捜索できる人は少ないので」と可能な限り参加します。

地元の漁師も船を出して、現場まで送ってくれます。

海の状況などの情報を提供します。

「みんな、損得は考えずに、本当に熱心にやってくれます」と感謝します。

「今も家族は待っている」、その思いが、ダイバーを海に潜らせる。

○NPO法人 FUKUSHIMAいのちの水

震災直後から活動しているNPO「災害支援援助隊アガペーCGN」は、福島県と他県との災害の質の違いに気付き、23年5月、放射能災害に焦点を絞って活動することにし、別のNPO「FUKUSHIMAいのちの水」を設立します。

放射能に対する最大の案件は、乳幼児の被爆対策と妊産婦の墮胎回避であり、苦慮の末、「ひとりの子のいのちを救うために」というキャッチフレーズのもとに、ミネラルウォーターの配布を計画します。

行政は、「水道水は安全」といっている手前、ミネラルウォーターの配布は頼めません。

ボランティアに頼り、資金の確保、水の調達・配布を行ないます。

配布を知った母親達も活動に参加します。

活動は水の配布から、放射能に関する情報提供、健康被害に関する傾聴、講演会、相談へと広がります。

福島で安全に子どもを育てられるまで、活動は続きます。

○企業や関係団体

震災直後では、救援や被災者の生活に必要な燃料の確保に苦労しました。

震災で製油所が被災したり、輸送網が寸断されガソリン、灯油の調達に支障を生じます。

石油連盟では、タンクローリーの確保と被災地への通行許可を得るのに困難を極めます。通行許可については、その必要性を訴え、申請なしでも通行できるように政府を動かします。

被災地外には、被災地に優先して調達することの理解を求めます。

松井専務理事はいいます、「業界一丸となって、利益を度外視して頑張った」

トヨタ自動車東日本

岩手県釜石市の水産加工会社の支援を行います。

工場では、24年4月に移転先で操業を再開したが、人手不足などで売上は震災前の6割程度にとどまっている。

トヨタ自動車流の「カイゼン」で、作業の無駄を極限まで省いて、生産性を高めることを指導します。

スイッチひとつの位置を15cmずらすことでも、生産性は向上します。

同社は岩手県の仲介で、沿岸部の延べ8社の支援を行い、さらに5社の指導も検討しています。

麒麟ビール

東北3県の若手農家が、農業経営を学ぶ講座を支援しています。

生産性の高い農業を実践できる人材を育成することで、被災地の活性化につなげるのが狙いです。

商品開発、収益管理…

研修期間は25年4月から約一年間、麒麟ビールは1億5千万円を出資します。

NTTファシリティーズ(ビル管理業)

福島県飯舘村から避難生活を送る同県伊達市の仮設住宅で、野菜の水耕栽培設備などを提供します。

リーフレタス、小松菜などを作ります。

水耕栽培は早く、簡単に作れるのが魅力で、定置から収穫まで25日、年15回の収穫が見込め、天候に左右されません。

企業の震災支援は、発生当時の人的支援や救援物資の提供、義捐金等の一時的なものから、地域経済を立て直すための中長期的な活動へと軸足を移しています。

第5章 支援の達人になるために、「『助けて』って言えますか」

今回のレポートを書くために、いろいろな資料を集めました。
平成24年1月9日の新聞記事です。

「支援の経験が力に」 関西学院大学 室崎教授

被災した側が支援を受ける力を「受援力」と呼んで、その力を高めることが必要ではないかと考えています。

日本はもともとコミュニティー内や、姉妹都市のように顔が見える関係の中で問題を解決してきました。

「互助」の考え方です。

ボランティアのように不特定の関係である「共助」には慣れていません。

ボランティアの申し出に対して、「来てもらっても、受入態勢が整っていません」そのうらには、「よそから来てもらう人にお茶のひとつも出さないわけにいかないだろう」という発想があって、受入を負担だと感じてしまうのです。

特に受援力が問題になるのは自治体ですが、最近、防災計画のなかに「受援計画」を盛り込もうとする動きが出てきました。

例えば、支援に来た車両の駐車場をどうするか、物資の地域内での運搬方法とかを、あらかじめ決めておきます。

それでも自治体は余力が無いので、国が受入の手伝いをします。

「受援支援」です。

「善意をつなぐ『感謝』」 関西大学 高木名誉教授

日本の社会では、人に助けをもらおうと、怠慢とか、自立していないとか、ネガティブな評価を受ける傾向があり、助けを求めることを我慢します。

でも、「助けられ上手」は「助け上手」をも生み出すのです。

例えば、電車で若者がお年寄りに席を譲ろうと声をかけた時、「結構です」と冷たく断られたら、この若者はお年寄りに席を譲らなくなってしまうかもしれません。

逆に「一駅で降りるけど、ありがとう」と感謝すれば、若者は次もそうしようと思うでしょう。

助けられることと、助けることは、密接につながっています。

日本人は助けをもらった時、「すみません」とよく言います。

相手に負担をかけたと思うからです。

そのお返しができれば良いが、出来ないと気分が重くなり、しまいには助けを求めなくなってしまう。

同じような場面で、アメリカ人は「サンキュー」と言います。

「ソーリー(すみません)」とはあまり言いません。

別な機会に自分も助ければ良いと考えているからです。

援助を受けることは、何も〈タダ乗り〉ではないのです。

日本の社会でも、助けられ、助け返す機会がもっとたくさんあれば、「助けて」が言いやすくなると思います。

ボランティアは、対価を求めない奉仕の精神で行います。
ただ、日本のことわざに「情けは人の為ならず」とあります。
巡りめぐって、自らに還元されるのである…
ボランティア活動にポイントを付与し、そのポイントを自分や家族などの受ける
ボランティアに利用できる制度もあります。

いずれにしろ、ボランティアをする、ボランティアを受けることで、支援者側と
受援者側の視点が良く分かります。

第6章 帰らぬ生活

東北では、震災以前の生活を取り戻そうと、苦労を重ねています。
福島では未だ、原発事故による放射能汚染、
宮城、岩手の沿岸部では、従前の土地を捨てての高台移転、
それぞれの家族を抱えて生活を維持するため、故郷を離れる……

被災地では人口流出が止まりません。
宮城、岩手の沿岸24市町村では、25年1月現在、震災以前に比べて
3万5千人余りも減っています。

「稼げる仕事があれば、故郷に戻りたかった…」
岩手県大槌町で新築の家を流された吉田久人さん
今は同県内陸部の花巻市で、一家5人で暮らしている。
遠洋漁協の船員だったが、震災後、住宅ローン2000万円を背負い、妻に支えられ
宅配便の運転手として生計を担っている。
「大槌に戻りたいが、仕事、両親の通う病院が少なく、花巻に根を下ろします」

人口の減少については、住民票の移動から把握しますが、住民票を残したまま
故郷を離れている人もいます。
いつか、故郷に戻ることを夢みて

宮城県山元町、私は2度現地支援で訪れました。
仙台市の南に位置し、「仙台のベットタウン」であったが、震災により鉄道は
不通となり、利便性が失われた今、人口は震災以前の△18%の13600人と
なった。
人口の流出が続けば、復興計画は絵に描いた餅になってしまう…

被災者ははっきり見えない事業や計画を手がかりに、2年以上も不自由な生活を
余儀なくされています。
国が、自治体が魅力ある将来像を描くのはもちろん、その実現性をもっと具体的に
示すことが必要です。

震災1年後の情報です。
震災で多くの行方不明者が出ました。
1年を経過した時点で、行方不明者の9割の死亡届を提出しています。
震災から時間が経つほど、身元の確認率は低下してきます。
家族にとって、死亡届を出すことに躊躇しているのと、遠く避難していることが
そうさせています。
国は、戸籍法の弾力運用をし、家族がチェックシートに行方不明の状況を記載
することで、市町村が死亡届の受理ができるように緩和した。
そうすることで、相続や生命保険の受け取りが可能となり、震災からの生活設計を
後ろ押しができます。

東北3県では、「震災遺児」は240人います。
うち、6割の保護者が里親登録をしています。
3親等以内の親族が遺児を引き取る場合は、「親族里親制度」と呼ばれ、国や
県から経済的支援を受けられます。
これに対して、一般の里親が対象なのが「養育里親制度」です。
遺児の生活支援に国や県はもちろんのこと、多くのボランティアがいることを
ご存知ですか。
「あしなが育英会」、災害や事故などで親を亡くした遺児の成長に必要な
支援を、多くのボランティアが「あしながおじさん」として支えています。

前回のレポートでボランティアについて、お話しています。
奉仕の精神、見返りを求めない、してあげていると思わない、長期支援が望ましい…
これを行う方法のひとつは、自分に無理のない程度の支援を行うことです。
仏法で言う「いい加減」、ちょうどよい加減の支援に心掛けてください。
でない、してあげているとの驕りや長期の支援は出来ません。
「あしながおじさん」が増えることを願っています。

「故郷を見捨てた」のではない
福島県いわき市の熊谷久美子さん
夫は仕事でいわき市に残り、長女を連れて新潟に引っ越した。
いわきに居ては、放射能被害を意識し、外で遊ばせられない、ついつい過剰に反応し、子供に大声をあげてしまう。食事もしかりです。
二重生活は負担で、生活も制限されるが、子供のことを考えれば、仕方のない選択です。
でも、「避難したことで『故郷を見捨てた』という罪悪感に苦しめられている」と思う人はたくさんいます。
避難先でも根を下ろせなくなります。
行政、避難先の自治体、避難者同士で、この問題に向き合い、心の復興を進めてもらいたいと考えます。

陸前高田市の吉田寛さん、長男の芳広君親子です。
母、妻と次男を津波で亡くしました。
震災後1年のことです。
仮設住宅で二人の生活、そして父親(実は養父だった)から引き継いだ電器店「ヨシダムセン」を仮店舗で経営しながら、寝る時間を削ってまでも芳広君の物心面に愛情を注ぎます。

寛さんは高校進学に際して、電気店を継ぐ決心を父に告げました。
すると、「実の子じゃない。施設から引き取り養子にした」
「店を継がなくても良いんだ、好きなことをしろ」といわれました。
それでも、自分を一番愛して、大切にしてくれたのは父だと感じ、迷わずに店を継ぎました。
そして、父が病気で亡くなった時、一生この地で店を続けることを誓った。

芳広君に、「電器屋なんかやんなくていいぞ」と水を向けてみた。
答えは「やんない。でもどうしてもって言うならさあ…」
ちょっと生意気な笑顔がうれしかった。

父の思いと、家族との思い出を抱いて、芳広君の成長を見守っています。

家族の元に戻った携帯電話、津波2分前の最後のメール
陸前高田市職員の福田晃子(こうこ)さんの携帯は、市民会館の解体現場で2年後に見つかった。
津波で亡くなった晃子さん、携帯も海水をかぶったはずに関わらず、電源が入り、そこには当日のメールが残されていた。
「私は大丈夫、まだ揺れている」「大丈夫？私達は公園に避難中」

晃子さんは戻ってこない、でも、家族の元には遺品と思い出が残ります。

震災半年後に届いた、亡き母からの手紙
宮城県亘理町の小野望美さん(10歳)は、母の由美子さんを亡くし、父と姉の3人で暮らしています。

望美さんの小学校入学時、母がランドセル会社のタイムレターの企画に応募し、千日後に娘に届くようにしていた。
『このてがみがとどいたとき、のぞみはどんな子どもになっているのでしょうか』
『げんきに学校にいつてくれるだけで、おかあさんは、とてもあんしんしていました』

「お母さんが居なくなつて、最初は寂しかったよ。でも、一人じゃないから、立ち直れた」
お父さんの帰りは遅く、部活がある姉に代わつて家事をします。
「お母さんが見ていてくれるからね」母が未来の望美さんへ送つた手紙を、大切に持っている。

第7章 あれからの南三陸町

宮城県南三陸町、私は平成23年9月に現地支援を行いました。
津波で多くの職員などが亡くなりました。
小学校、中学校は高台にあり、犠牲者は無かったかと思います。

町役場は海に注ぐ川沿いにあり、津波が押し寄せ、庁舎は瓦礫化としていました。
防災対策庁舎は、役場より海に近く、鉄骨を剥き出しにし、役場以上に悲惨な
状況を目の当たりにしました。
鉄筋3階建て共同住宅の屋上には、車が載ったままで放置されており、津波の
恐ろしさを物語っています。

前回のレポートでふれました「遠藤未希」さん、新婚の町職員です。
防災対策庁舎で避難を呼び掛けつづけ、帰らぬ人になりました。

多くの人の命と引き換えに、避難を呼び掛け続けて自らの命を失った人たちの
記録が明らかになりました。震災1年後のことです。
地震発生直後から放送が始まり、庁舎内の会話も含めておよそ30分が
残っていました。

防災対策庁舎では、未希さんのほかにも、三浦課長補佐、佐藤係長らも
住民避難にあたっていました。
南三陸町では大津波警報が出る前から、住民に避難を呼びかけています。

「震度6弱の地震を観測しました。津波が予想されますので、高台に
避難してください」未希さんの呼び掛けです。
津波警報は6mとの情報を確認し、「急いで」「直ちに」とより緊迫した放送が
進みます。

防災対策庁舎から海面は確認できます。
海面の変化を伝え、津波の襲来を伝えています。
「最大で6m」の放送も、最後の4回だけは「10m」に変わっていました。
佐藤係長の話です。
「水門の高さは5.5m、防災対策庁舎は12mなので、6mの津波なら庁舎を越える
ことはない」
しかし、庁舎から確認される津波は予想以上に大きく、放送を続けようとする
未希さんの声を遮るように、「上へあがっぺ、未希ちゃん、あがっぺ」という周囲の
制止の言葉で記録は終わっています。

呼びかけは計62回、うち18回は三浦課長補佐の緊張感を持ったものです。

庁舎にいた職員は、6mの津波なら庁舎は大丈夫と思っていました。
しかし、6mから10mにかわり、さらに庁舎から確認した津波に恐怖を抱き、
屋上へと避難しました。
けれども、庁舎を超える津波が襲います。
結果、未希さんは命をおとし、三浦課長補佐は行方不明…
使命に殉じて尊い命を失いました。

東北選出の国会議員が、マスコミで語っています。
「気象庁の発表に誤りがあった。20m津波が予想されたのにも関わらず、
宮城県6m、岩手県10mとした」
本当に20mの津波が予測され、そのまま発表されていたのなら、被害などは
変わっていた、もっと少なかったでしょう。

防災対策庁舎には花が絶えることはありません。
震災を風化させてはいけません。
南三陸町では、防災対策庁舎の保存について検討がなされましたが、費用のことや
庁舎で亡くなった遺族の意向もふまえて、取り壊しを決定しました。
佐藤町長だったと思いますが、重く、苦しい決断だったと思います。
平成25年11月 庁舎で最後となるかとの慰霊祭がありました。
一部遺族は、庁舎存続に国、県の支援を期待し続けるという。

阪神・淡路大震災でも、震災を風化させないための、メモリアルはいくつもあります。
ただ、悲しいかな観光の手段と思えるメモリアルも存在します。
考えはいろいろあると思いますが、私個人としては好ましくないと思います。

南三陸町は海の恵みで成り立っていました。
津波で、多くの生活を失ってしまいました。
現在、町民やボランティアが以前の生活を取り戻すべく、復興に取り組んでいます。
瓦礫の撤去から農地の整備、海中の瓦礫撤去から牡蠣、わかめの養殖環境の
整備と進みます。
牡蠣は広島からの支援を受けて、養殖は軌道にのったと聞いています。
そして、大型牡蠣を育てることでブランド化、生き残りを賭けます。
まだまだ復興活動は続いています。

第8章 あれからの大川小学校

宮城県石巻市、大川小学校。
教師、生徒ら70数名が亡くなった小学校です。
地震発生、津波予想が出されるなか、避難場所などの選択に時間を要し、結果、多くの命が失われました。

学校は海拔0mだったと思います。
現在も4名の生徒の行方がわかりません。
小学校の瓦礫は整理され、一角には慰霊碑が建てられています。

子どもが見つかった親も、行方不明の子どもを探すため、現在も重機を操り学校近くの沼地などを探索します。
時間がある限り、母親達は探し続けます。
24年2月13日、学校近くの富士川では搜索依頼に基づいて、水が堰き止められ、川底が覗いています。
母親達は河原を歩いては、瓦礫や流木の下をのぞき、手がかりを求めます。

大川小学校の近く、長面地区では23年10月以降、農地再生に向けて数十人が瓦礫を取り除いています。
自身の水田が水没し、仮設住宅で暮らす三條昭夫さん(73歳)
「まだ見つかってない4人の子ども手がかりがないかと、小さなものにも気を付けて作業をしている」と話をします。
24年1月 最高気温が0.1度にも拘わらず、凍てつく風雪にも手を止めることはなかった。

「ようやく着せることが出来たね」
6年生だった長男の大輔君を亡くした今野ひとみさんは、息子が進学する予定だった中学校の制服に着せ替えて合成した写真に語りかけます。
震災後1年の大川小学校の合同法要のことです。
大輔君は、3月17日、小学校の裏山で他の児童と折り重なるようにして倒れていました。
津波が襲う直前、「山さ逃げたほうがいいんじゃないかね」と話していたと、助かった児童から聞きました。
ひとみさんは、大輔君のほか、長女麻里さん、次女理加さんを失い、ご主人と仮設住宅で生活しています。
法要を終えて、二人で墓参り後、小学校前で掌を合わせます。
子ども達の写真を見ると涙がこぼれ落ちるが、その度に「何、おっかあ泣いてんのや」と語りかけてくるような気がするという。

「早くお兄ちゃんと一緒に…」
鈴木巴那ちゃん(当時9歳)の母、実穂さんは震災後2回目の夏を迎えた今も、捜し続けています。
兄の堅登君、義母の好子さんは震災の3月に遺体で見つかった。
7月下旬、お墓が完成した。
お墓には、巴那ちゃんが好きだったAKB48のような赤と黒のチェックのスカート、ベストと小学校の一握りの土を埋葬した。
「体の一部でもいい。早く見つかってお兄ちゃんたちと一緒にしてあげたい」
実穂さんは捜し続けます、巴那ちゃんだけでなく、未だ見つからない大川小学校の3名も、多くの父兄と地域の人たちとともに。

「命」「支え合い」が大切

24年3月11日、狩野孝雄さん、あけみさん夫婦は、人気のない山林わきにたたずんでいます。

祭壇も何もない地面に花を手向け、手を合わせます。

三姉妹の三女 愛さんが遺体で見つかった場所です。

愛さんは震災から四十九日の日に見つかりました。

夫婦はやっと再会できた愛さんの棺に3日間寄り添って寝ました。

笑い声の絶えない家庭が、泣いてばかりの日々を過ごします。

そして1年、次女 唯さんの手紙です。

「唯をお姉ちゃんと愛の三姉妹に生んでくれてありがとう」「お父さんとお母さんの子供で良かった」

あけみさんは途中から涙で読めなくなった。

これほど悲しくて涙を流した1年はなかったが、残された家族で支えあって生きていると感じた1年もなかった。

長女 悠さんは4月に美容師を夢見て専門学校に通うため、仙台でのひとり暮らしをはじめます。

唯さんは愛さんの好きだった漫画が発売になると、「愛に読ませる」と真っ先に買いに行く。

二人は悲しみから確実に、一歩ずつ歩んでいます。

夫婦はそう感じます。そして、「多くの人に支えられた1年」は感謝ばかりだ。

「命の大切さ」「家族の大切さ」を胸に、前を向いて生きて行こうと思っています。

「ひまわりのおか」

大川小学校で子どもを亡くした母親たちは、学校近くの高台にひまわりの種をまきました。

応援の自衛官、警察官たちも、ひまわりに水を与えます。

高台だけでなく、小学校の周りにはひまわりが咲きます。

震災から3回目の今夏も、ひまわりは咲きました。

大川小学校で子どもを亡くした8人の母親たちの思いが、絵本になりました。

「ひまわりのおか」 岩崎書店

子どもたちが逃げようとした高台のひまわりの成長と、亡き子どもたちを重ねた思いを綴ります。

絵本にしたのは、小さい子どもにも読んでもらい、何かを感じてもらいたい。

母親たちはいいます、「子どもたちが生きた証し、震災を風化させたくない」と。

絵本はこう締めくくられる、「また夏がきたら会おうね、ずっとずっといつしょだよ」。

絵本の印税は、未だ行方の分からない児童の捜索費に使われます。

「なかなかあったよ、ほめて」

大川小学校での悲劇は、児童の死だけではありません。

大川小学校教諭 故佐々木 孝さんの長男惣太郎君(震災時6歳)

24年に行われた石巻市の合同慰霊祭参加後、作文を手に墓参りをしました。

〈なきたいことがいっぱいあったけど、ぼく、がまんしてなかなかあったよ。

えらいでしょ。ゆめのなかで、ほめてね〉

母親のかおりさん(中学教諭)は、惣太郎君に話しかけました、「お父さんにお手紙書いてみる?」

「難しかったけど、『お父さんに届けばいいな』って思って最後までがんばったよ」

震災前、孝さんからもらったランドセルを上手に背負えるように何度も練習しました。

そのランドセルは津波で流されました。新しく買ってもらったランドセル、今は

一人で背負えます。

1年の成長とともに父の墓に誓います、「おばあちゃん、おかあさん、おねえちゃんもぼくがまもる」。

「児童を守れなかった」負い目

前述の 佐々木 孝さんを亡くした母の和子さん

24年3月11日、大川小学校にある祭壇を訪れました。

「孝はこの辺で見つかったのかな。寒かったね」、手を合わせます。

子どもを亡くした母親に声掛けられました、「息子がお世話になりました」。

和さんは、「守ってあげられなくて、ごめんなさい」、そう言うのが精一杯だった。

涙を浮かべてわびる和子さんを気遣うように、子どもの母親はゆっくりと歩み寄り、背中をさすってくれました。

佐々木さんの奥さん、かおりさんも「今も夫の死と向き合えないでいます」と話す。

そして、「なぜ子どもたちを守れなかったのか」との保護者たちの思いが胸に刺さります。

教職員の遺族の中には、犠牲になった児童の家を訪ね、謝罪と供養をして回る人もいと聞く。

子どもを失った親たちも、悲しみへの向かい方はそれぞれ異なる。

犠牲者が出た原因を明らかにするように求める親がいる一方、市教委が開いた説明会に出る気になれない親もいる。

愛ちゃんを亡くした狩野あけみさん、「いまさら話を聞いても、悲しくてかわいそうになるだけです。状況が変わるわけじゃないので…」

悲しみが癒されることはない、それぞれに向き合い方が異なります。

今も行方不明の児童を求めて、重機を操る親がいます。

それを支援する親たちもいます。

24年3月18日 石巻市教育委員会は遺族らへの説明会を開いた。

「なぜ校庭に長時間とどまったのか」

「一年以上も経って、ようやく(事実解明)スタートラインに立とうという段階では…」

次女・千聖さんを亡くした紫桃隆洋さん、「我々は全てを知りたい。そうしないと犠牲になった娘に報告できない」と訴える。

自ら、助かった児童の家庭を訪ね歩き、校庭で何があったのかを独自に調べる。

次女・みずほさんを亡くした中学校教諭の佐藤敏郎さんも、同じ思いだ。

「子どもが犠牲になった過程を明らかにしていくのは正直、つらい。でも、子どもの命を預る教員としての使命感もある」と話す。

教育委員会は「第三者委員を交えた検証組織について、内部で話し合いをはじめた」と説明するも、あまりの遅きに保護者の不信感はぬぐえなかった。

25年7月7日 第三者検証委員会は、中間報告をまとめた。

震災前の前、12年間在籍した教職員を対象にアンケートを実施した結果、回答した20人のうち、危機管理マニュアルの内容を知っていたのは8人で、想定する災害に「津波」を挙げたのは2人とどまった。

また、津波に関しても、「在職中に心配なかったか」と問うと、12人が「ない」と回答。

「職員会議などで話題になったことがあるか」の質問にも、14人が「ない」と答えた。

当時在籍した教職員13人(うち10人は死亡)について、同小学校での勤続年数も資料に基づいて調べた。

その結果、2年未満が8人と約6割を占めており、教職員の多くが学校周辺の地理に熟知していなかった可能性を指摘した。

私の記憶が間違っていなければ、大川小学校は海拔0メートルだったと思います。そこに10メートルの津波がおそったこととなります。

犠牲は、危機管理が徹底できていなかったことにつきます。

二度とこのようなことがないように、危機管理意識を共有することが大切です。

検証委員会の作業は続きます。

第9章 復興応援団

第4章に続いて震災支援、ボランティア等をご紹介します

アマチュア天文家 佐藤直人さん

埼玉県入間市職員の佐藤さん、東日本大震災の犠牲者への鎮魂と復興への願いを込めて、自身が発見した小惑星に「Touhoku」と命名しました。

また、世界がこの大震災を忘れないで欲しいとの思いもあります。

肉眼では確認できませんが、3月11日の夜には最も地球に近づき、真南の空に獅子座の中できれいに輝くという。

17.7等級の暗く、肉眼では見えないが、火星のすぐそばに位置するという。

佐藤さんは、「日本では、死者の魂は星になるという言い伝えがある。

11日には空を見上げて、犠牲者への思いをはせてもらえれば」と話す。

被災地に鎮魂のタクト 指揮者の佐渡裕さん

「震災で亡くなった人たちに手を合わせ、復興を祈るうたを演奏したい」

佐渡さんが芸術監督をする「スーパーキッズオーケストラ」を率いて、岩手県釜石市の根浜海岸に来ました。

根浜海岸は、白砂青松の景勝地で、約2キロの砂浜、松林は瓦礫で埋まってしまうしました。

小学生から高校生までの32人は、佐渡さんの指揮により「G線上のアリア」など4曲を演奏します。

震災後、佐渡さんは、命を助けることも、被災地の空腹を満たすことも出来ない自分の無力を感じ、「何か役立てることをしたい」と考えていました。

そんな佐渡さんに、海岸を以前のように戻したいと願う根岸海岸の旅館「宝来館」の女将 岩崎昭子さんから手紙が届きました。

津波に吞まれながらも一命は助かり、旅館を被災者に開放しました。

佐渡さんの思いを知り、ぜひとも根岸海岸に来て欲しいとの思いを伝えます。

佐渡さんもスーパーキッズオーケストラも、犠牲者の鎮魂と東北の復興を願って演奏、「ふるさと」の演奏では岩崎さんに指揮するように佐渡さんが声を掛けます。

手渡したタクトには、「希望のタクト 佐渡裕」と記されていました。

釜石市のほか、同県大槌町、福島県いわき市でもコンサートが計画されます。地元の高校生、自らが首席指揮者を務める「シエナ・ウインド・オーケストラ」とともに。

佐渡さんは、被災地の子どもたちに「夢」をもつことの大切さも伝えます。

被害を受けた仏教会

地震、津波により多くの寺社も被害を受けました。

被害を受けながらも、ご遺体の安置などに努めます。

宗派を挙げて被災者の支援、被災寺の支援を行います。

法相宗大本山薬師寺(奈良市)は、震災で親を亡くした中学生、高校生数人を、引取り、高校卒業までの学費、生活費の全額負担を決めた。

さらに、卒業後、僧侶として寺に残る場合は、大学への進学費用も負担するという。

山田法胤管主は、「私も父を事故で亡くし、中学の時に寺に入り、育ててもらった。苦労した経験を語り継ぐ僧侶になって欲しい」と話す。

震災後、犠牲者の追悼法要や般若心経の写経会を続ける。

安養院(福島県いわき市)住職 久野雅照さん

安養院は、福島原発から約50キロの場所にある。放射能被害におびえ、
県外避難などで家族がばらばらになる住民たちの姿に胸を傷めてきた。

ボランティアに来ていた神戸市の僧侶から「希望の灯り」のことを聞き、東北復興の
象徴にと、分灯を願い出ます。

24年1月17日、阪神・淡路大震災後の17年後のこの日にプランタンに分灯、
いわき市までの約800キロを歩いて持ち帰り、震災後1年の3月11日に行う法要で
とす。

いわき市までの道すがら、各地からの復興支援への感謝を伝えます。

「この灯りには、神戸の市民が寄せた復興の願いや温かみを感じます。

これを受け継いで、東日本の被災地へ希望を届けたい」と話す。

常円寺(福島市)住職 阿部光裕さん

週末になると、袈裟を脱ぎ、マスクと長袖長ズボン、長靴姿に変身します。

ボランティアとともに、スコップやつるはしで、通学路など歩道の土をかき出し、
除染します。

丸刈り頭で、僧名の鶴林光裕から、「つるりん和尚」と慕われる阿部さんが除染を
はじめたのは23年6月。戦前から子どもたちに行儀作法を教えていた寺に、
原発事故後、境内で遊ぶ子どもの姿はありません。

境内だけでなく、外で遊ぶ姿が見られなくなったのです。

市が行う除染は進まず、市民、ボランティアと一緒に作業を始めます。

作業だけでなく、寺が所有する裏山を除染した土や廃棄物の仮置き場に
提供しました。

「つるりん和尚」はいいます、「行政に不満を言っても始まらない。」

「自分たちが動かないと、子どもたちは守れない」。

境内を子どもたちが走り回る日が来ると信じて、除染を続けます。

*福島では原発事故により、瓦礫などの片付けは遅れています。

宮城県、岩手県の多くの被災地が瓦礫の片付けを終えて、生活支援に
ウェイトを移しているなか、やっと作業が進みだした状況です。

心の支え、スポーツ界

多くのスポーツ選手が、東北を応援しています。

くじけそうな被災者の心を支えます。

いろいろなアスリート、選手たちがいろいろな形で東北を支援しています。

ご紹介の順を考えていましたが、順番を変えざるを得ない状況が発生しました。

平成25年11月3日 東北楽天イーグルス リーグ優勝どころか、結成9年で
日本一に輝きました。

どちらかという、巨人ファンの小生ながら、楽天が優勝して良かったかとも
思います。

球団発足からパリーグのお荷物、底辺をさまよった球団です。

その球団が日本一に、東北にどれだけの勇気を与えたでしょう。

楽天も東北の思いに応え、立派といえるでしょう。

星野監督が言いました、「被災者のみなさんに勇気を与えてくれた選手達を
ほめてやってください」。

平成23年、本拠地で迎えた開幕ゲーム、選手会長 嶋選手のスピーチです。

本日はこのような状況の中、ここKスタ宮城に足を運んでいただき、
また、テレビ、ラジオを通してご覧いただき、誠にありがとうございます。

球場に来るのが簡単でなかった方、来たくても来られなかった方も
大勢いらっしゃったかと思えます。

地震が起こった時、僕たちは兵庫県にいました。遠方の地で家族ともなかなか連絡がとれず、不安な気持ちを抱いたまま全国各地を転戦していました。

報道を通じ、被災状況が明らかになっていくにつれて、僕たちもどんどん暗くなっていきました。その時のことを考えると、今日、ここKスタ宮城で試合を開催できたことが信じられません。

震災後、選手みんなで「自分達は何ができるのか？」「自分達は何をすべきか？」を議論し、考え抜き、東北の地に戻れる日を待ち続けました。

そして、開幕5日前、選手みんなではじめて仙台に戻ってきました。変わり果てたこの東北の地を、目と心にしっかりと刻み、「送れて申し訳ない」という気持ちで避難所を訪問したところ、みなさんから「おかえりなさい」「私達も負けないから頑張ってね」と声を掛けていただき、涙を流しました。

その時に僕たちは何のために闘うのか、はっきりしました。この1ヶ月半で分かったことがあります。それは、「誰かのために闘う人間は強い」ということです。

東北の皆さん、絶対に乗り越えましょう、この時を。
絶対に勝ち抜きましょう、この時を。
今、この時を乗り越えた向こう側には、強くなった自分と明るい未来が待っているはずです。
絶対に見せましょう、東北の底力を！
本日はどうもありがとうございました。

野球界では、イチロー、松井秀樹、ラミレスらも応援しています。私は23年9月に南三陸町を訪れた際に、野球ボールを持ち込みました。子供達に元気で野球をして欲しいとの思いで。きっと、震災を乗り越えて、多くの夢を掴み取る子供達がいるでしょう。

高校野球界でもいろいろな支援スピーチがあります。平成23年春の選抜大会 岡山創志学園主将 野山慎介君です。「東日本大震災では多くの尊い命が奪われ、私達の心はかなしみでいっぱいです。被災地では全ての方々が一丸となり、仲間とともに頑張っておられます。人は仲間を支えられることで大きな困難を乗り越えることができると信じています。私達に今、できること、それはこの大会を精一杯、元気を出して戦うことです。頑張ろうニッポン！生かされていることに感謝し、全身全霊で正々堂々とプレーすることを誓います。」

平成23年夏宮城県予選 柴田高校主将 佐藤裕次君です。「私も含め、普通に生活できていたことがどれほど幸せだったかを改めて実感していると思います。人は支えあい、協力することで、希望を見いだし未来へ進むことができると信じています。いつまでも下を向いては、何も変わりません。だからこそ、私たちは今大会を通して勇気や感動を与えられるよう、熱く、元気よく、精いっぱい戦い、野球ができる喜び、そして、その環境にあることを人々に感謝し、全力プレーで正々堂々と戦うことを誓います。」

平成24年春の選抜大会 石巻工高主将 阿部翔人君「日本がひとつになり、その苦難を乗り越えることができれば、その先に必ず大きな幸せが待っていると信じています。だからこそ、日本中に届けましょう。感動、勇気、そして笑顔を見せましょう、日本の底力、絆を」

自分にできることを考え、そして、被災地への力いっぱいのメッセージです。

卓球の福原愛ちゃん

「泣き虫愛ちゃん」は仙台生まれ、3歳で卓球をはじめ、小学4年まで過ごした。愛ちゃんはいいます、「被災者に『がんばって下さい』という言葉は絶対に口にしないと決めている。苦しんでいる人に『がんばって』なんて、無責任に言えません。苦労されている人の代わりに、私たちが、がんばればいいんです」。

震災直後の日本リーグの会場、誰よりも長く、募金箱をもち続けます。自分の行為で、少しでも多くの人に東北を思ってもらえる、募金につながればいい。「客寄せパンダ」でもかまわないと思う。

震災2ヵ月後、オランダでの世界選手権でロンドン五輪の出場権を獲得。帰国翌日には仙台にいた。世界選手権の雰囲気そのまま、東北に届けたかった。校舎には津波で流された車を取り残されている…。惨状にショックを隠せない。思い出の仙台とは思えなかった。それでも被災者とふれあい、「卓球、がんばって」との励ましに、逆に力をもらった。

「震災が起こるまで、勝負の結果しか、自分で興味がなかった。でも、震災後は、勝っても負けても、被災された方や、東北の方に伝わるプレーをしたいと思うようになった」

世界選手権の銅メダルでも、たくさんの方が喜んでくれた。五輪のメダルなら、もっとたくさんの人に喜んでもらえる…。被災者の笑顔が、心の支えになっている。

大相撲 横綱 白鵬関

大相撲一行が、岩手県山田町を訪れたのは23年6月のことです。遠くの海を見つめるように、被災地の話を聞きます。

その後、震災で被害を受けた同町で「復興の土俵」建設が進みます。沿岸の公園にあった相撲場が津波で流失、「子どもたちの土俵がなくなった」と聞いた白鵬関ら力士たちが費用を支援する。

震災が起きた3月11日は、白鵬関の26度目の誕生日だった。「ちょうどその日でしたから、震災に対する気持ちは誰よりも強い。人間ですから、忘れることもありますが、震災は絶対に忘れちゃいけない」

24年4月現在、山田町では約1900世帯が仮設住宅で暮らしており、下旬に計画されている白鵬関の訪問、土俵入りが被災者を勇気付けることを願っている。

東北出身の陸上選手

箱根を走る選手2名のお話を紹介します。

平成24年 第88回箱根駅伝5区

3度のガッツポーズのあと、両手を広げてゴールテープを切った東洋大・柏原。自らの区間記録を29秒更新する1時間16分39秒と“新・山の神”が新たな伝説を作り上げた。

4年目で初めてトップでたすきを受け取り、快走、4年連続区間賞は史上8人目。被災地で故郷の福島からの応援も受け、「自分が苦しいのは1時間ちよっと、福島の人に比べたらきつくはなかった」と、地元の応援に感謝した。

平成25年 第89回箱根駅伝8区

箱根駅伝が大好きだった天国の姉に贈る快走、青学大・高橋。

大学の寮に入った直後、宮城県東松島市の実家は津波にのまれ、姉が犠牲に。

陸上の中距離選手だった姉、「駅伝っていいよね」と2人で語り合い、弟の大学進学に大喜びだった。

1年生だった前はメンバーからもれ、来年は絶対に選ばれるぞと誓った。

「とにかく前をめざして走った。区間賞は信じられない」

母は姉・沙織さんの遺影を手に観戦、「走っている姿を見せられてよかった」と話す。

父は東松島市復興本部に勤務する、「やつの走りに負けず、前に進みたい」と復興への思いを新たにした。

彼らは被災地の思いを背負い、走るにより、被災者たちに勇気を与えます。
負けるな東北!

東北出身の芸能人たちも復興応援団です。

福島県郡山市の西田敏行、宮城県女川町の中村雅俊、

仙台市のサンドイッチマンの二人……

東北出身でない長渕剛、志穂美悦子、渡哲也・舘ひろしたちの石原軍団etc…

多くの芸能人も復興応援団です。

負けるな東北!

第10章 外国からの応援団

東日本大震災では多くの国々から、温かい支援を頂きました。

アメリカ軍の支援については、第3章「ともだち作戦」でご紹介しました。

オーストラリアはいち早く、捜索支援を行ってくれました。

3月16日には、南三陸町で救助犬を伴って救助、捜索活動を開始しています。

その他、食料品関係も多数、提供してくれています。

そして、外国首相クラスとして、ジュリア・ギラード首相は初めて被災地を

訪問しました。4月23日のことです。

被災状況を見た後、避難所を訪問、靴を脱いで避難者に近づき、声を掛けたという。

ギラード首相の対応は、女性ながら肝の据わったもので、その後の日本と

オーストラリアの関係向上に評価は高い。

義捐金額はアメリカに次ぐ台湾

義捐金額はアメリカの263億に次いで、99億円となっています。

1999年の台湾中部地震の日本支援に対する恩返しとされるが、台湾の人たちと日本のつながり、親しみを物語っています。

台湾はかつて、日本の統治下にありました。

韓国・北朝鮮と住民感情は異なり、多くの人たちは日本に好意をもっているといえます。

評論家の「金美麗(びれい)」さんに代表されます。

彼女は1934年生まれ、早稲田大学に留学、1962年政治難民となります。

その後、台湾政府の顧問等を務め、2009年には帰化しています。

「台湾の経済を考えて、アメリカに次ぐ義捐金額は、台湾がいかに日本を思っている証しである」と話す。

震災当時の台湾駐日代表 馮 寄台(フォン ジータイ)氏

50数年前の少年時代、外交官の父親と東京にきた。

そして、半世紀後、再び自ら外交官、駐日代表として来日した。

彼はいいです、「30数年の外交官人生で、日本での生活が生涯で、もっとも素晴らしい経験となった」と話す。

そして、3年半の勤務を終えて、平成24年5月、日本への感謝を胸に離日する。

震災は自分の人生、最大の衝撃だった。しかし、自然の猛威に生活基盤を奪われながら、日本人のおもいやりと公德心に深く感動した。

台湾の人たちが、震災発生直後から、義捐金集めなどの被災者支援に乗り出したことに、台湾人として誇らしく思った。

24年4月の園遊会、天皇・皇后陛下より、「台湾、ありがとう」のお声掛けを外交官人生、最高の荣誉だという。

日本人は強く、たくましい民族である。

大震災を必ずや、乗り越えるものと固く信じている。

幸せ世界ー ブータン

平成23年11月18日 ブータン国王夫妻は、震災で被災した相馬市を訪れた。

夫妻は小学校や漁港などを訪れ、「ブータン国、国民を代表して親愛の情と励ましの気持ちを持っています」などと激励、津波で大きく被災した地区では鎮魂の祈りをささげた。

海岸に向けて真摯に手を合わせる姿に、日本国民は感動、勇気、激励を頂いたのです。

ドナルド・キーン米コロンビア大学名誉教授
海外における日本文学研究の第一人者です。
東日本大震災、福島原発事故に見舞われた東北に、「必ず復興する。決して
絶望してはいけない」とメッセージを送り続け、被災地訪問を重ねます。
師は90の齢だったと思います。
平成23年6月13日、ニューヨークのジャパン・ソサエティーで公演し、「日本文学に
接し始めた18、19歳の時から、日本のことを思わない日はなかった」と日本への
愛着を語った。
平成23年1月 日本での入院中に「どう余生を過ごそう」と熟考し、愛する日本の
国籍を取得して日本に永住することを決意。
震災後、日本が大変な苦難に直面している状況を目の当たりにし、今こそ「日本人と
ともにいることが重要」と、永住の決意をさらに強固にしたという。
24年3月、日本国籍取得が認められた。
日本人の心に寄りそう米産「鬼怒鳴門(キーン・ドナルド)」師です。

第11章 見えてきた災害医療

ODMAT(災害派遣医療チーム)

DMATとは、「災害急性期に活動できる機動性を持ったトレーニングを受けた医療チーム」と定義されています。

医師、看護師、業務調整員で構成され、大規模災害や多傷病者が発生した事故などの現場に、急性期(おおむね48時間以内)に活動できる機動性を持った、専門的な訓練を受けた医療チームです。

平成7年1月17日 阪神淡路大震災、戦中・戦後を通じて最大の自然災害でした。

この震災において、初期医療体制の遅れが考えられ、平時の救急医療レベルが提供されていれば、救命できたと考えられる「避けられた災害死」が500名存在した可能性があったと後に報告されています。

これを期に災害医療についての多くの課題が浮き彫りとなり、この教訓を生かし、各行政機関、消防、警察、自衛隊と連携しながら救助活動と並行し、医師が災害現場で医療を行う必要性が認識されるようになった。

平成13年から検討がなされ、平成16年東京DMATが、平成17年に日本DMATが厚生労働省によって発足されました。

以降、新潟中越地震、JR福知山線脱線事故等で出動、実績を重ねてきました。

平成23年3月11日 14:50 国立病院機構災害医療センター内にDMAT本部立ち上げ、

15:10 EMIS(広域災害救急医療情報システム)を通じて全DMAT隊員に待機要請、

16:00 福島県立医大、仙台医療センターを参集拠点として派遣要請を発信、

17:15 岩手医科大学、筑波メディカルセンターを参集拠点に追加発信した。

千歳空港から花巻空港に、伊丹空港から同じく花巻空港に、そして福岡空港から百里基地へと 計78チーム、393名が空路で被災地入りをした。

その他、陸路などからも併せて、47都道府県全てから約380チーム、約1800人のDMATが東北に集まった。

被災4県の県対策本部に統括DMAT登録者が加わり、DMAT調整本部を立ち挙げ、活動拠点本部(福島県立医大他3ヶ所)とSCU(広域搬送拠点臨時医療施設)との連絡・調整・支援を行う。

それぞれの拠点本部、SCU以外の後方支援県にも統括DMAT登録者が配置され、効率的な災害医療体制は確立された。

DMATは、救護所活動、病院支援、域内搬送、広域医療搬送のみならず、病院入院患者の避難搬送支援も行った。

病院支援では、20病院に対して177チームが携わり、域内搬送では全国のドクターヘリの約半数の16機を含む19機で149人の患者搬送に携わった。

広域医療搬送では、花巻空港、霞目基地、福島空港から自衛隊機を使用し、19名を搬送した。

今回の震災において、DMATの参集力、組織的な体制は十分に立証できたと思うが、問題点も多く認識された。

- 1、DMATは阪神淡路大震災を教訓として、瓦礫の下敷き、そして開放された反動によるクラッシュ症候群の対応を訓練してきたが、東北では内因性疾患が8割以上を占め、外因性疾患も純粋な外傷は少なく、低体温症、津波肺(海水による誤嚥性肺炎)が多くを占めた。
- 2、DMATの活動期間は48時間と言われるが、実際にはさらに長時間の活動を余儀なくされた。
これは、津波などにより搬送手段が途絶え、震災直後に患者搬送が行えず、震災3日後に患者が一気に増えたためでもある。

- 3、被災地内における通信体制の確保が十分でなかった。
EMISの情報は生命線であるが、拠点病院だけでなく、全病院、SCUも網羅できる通信手段、衛生電話、防災無線、MCA無線などの複数の連絡手段の確保が必要である。
- 4、DMATに対する補給、支援体制を充実させる手段を要する。
陸路で被災地入りしたチームではガソリン不足で活動が制限されたり、空路でのチームは移動手段が確保できず、思うように活動が出来なかった。
また、食糧、医療資器材の枯渇問題は活動の根源を絶ってしまう。
このため、備蓄基地や補給支援体制も含めたロジスティックの充実が望まれる。
- 5、自衛隊との連携強化が望まれる。
被災地のあらゆる情報を持ち、かつ収集が可能であり、搬送・移動手段を持ち合わせている自衛隊との連携強化は、災害医療をより効率的に行うに必要不可欠である、
今後は自衛隊との連携も含めた運用を研究する必要がある。

こうしてDMATの活動は3月22日まで続けられた。

しかし、DMATで派遣された医療チーム員は、その後も被災地入りを繰り返し、医療支援や復興活動に従事したと聞く。

○JMAT(日本医師会災害医療チーム)

平成22年3月 日本医師会は自らが最大の医師職能団体であるにもかかわらず、また、地域医師会を束ねる立場にあるにもかかわらず、災害現場において医療活動を実行する能力に欠けていることを認識するに至り、災害対応を遂行する方策として、医師会JMATが提言された。

しかし、提言、検討途上に震災が発生した。

日本医師会は、これまでの検討結果をもとにしたJMATの派遣を3月15日に決定し、43都道府県に要請をおこなった。

3月17日、厚生労働省は日本医師会に対し、被災地への医療従事者の正式派遣を要請した。

急性期を担うDMATは発災72時間間での活動を想定していますが、東日本大震災では被害の甚大、広域などもあり、3月22日まで活動しました。

JMATは、このDMATを引き継いで、避難所、救護所における医療を担当し、また、被災地域の病院、診療所の診療への支援も重大な任務であった。
これだけではなく、在宅患者・避難者の医療や健康管理にも加わります。

JMATも医師を中心として、看護師などでチーム編成し、3～7日間を想定して活動します。順繰りに交代して被災地支援を行います。

JMATとは別に、日本精神科病院協会、日本薬剤師会(傘下の都道府県を含む)も活動を行っていましたが、一部はJMATの枠内に参加しました。

医師会以外の全日本病院協会や全日本民医連も独自に救護班を派遣していたが、これも順次にJMATの枠内に参入されていった。

被災地の医療体制の復興とともに、JMATの規模も縮小されていき、7月19日をもって活動が終了された。

JMATは、計1,394チーム、延べ6,239名が派遣された。

その後、JMAT-IIを組織し、被災医療機関や仮設住宅への支援が続けられた。

○石巻赤十字病院での医療

石巻市、東松島市などの医療圏において、石巻市民病院をはじめとして多くの病院が震災により被災、機能を失ってしまった。

そのなか、5年前に沿岸部から内陸部に移転し、免震機能、地上ヘリポート、広いエントランス(トリアージ場所を想定)、エントランスの壁にアウトレット(酸素供給などの設備)と、災害医療を想定して建てられた石巻赤十字病院は、その機能を充分以上に発揮した。

もともとは津波被害を想定したものでなく、三陸自動車道での事故を想定したという。

ハード面だけでなく、石井医療社会事業部長(外科医)は、災害時の地域医療の調整役となる県災害医療コーディネーターとして、最前線に立った。

日本DMAT隊員として、日赤DMATインストラクターとして各種の研修会に参加してきました。

院内ではマニュアルの整備、訓練を重ねてきました。

地域では、警察、消防、行政、自衛隊、医師会、近隣病院や地元の企業・商店とも災害時における連携を積み重ねてきました。

震災後、病院にはDMAT、赤十字災害チームなど、延べ3633チーム計約15000人が駆けつけました。

「多くが津波で亡くなったため、最初の2日間で重症の急性外傷は患者の4分の1にもいませんでした。院内の患者をDMATに搬送依頼、基準に満たないと断られたこともあった。(災害対応のルールが)津波を想定しておらず、訓練と実際の被害とのミスマッチが生じた。DMATの体制を見直す必要がある」という。

震災から6日後の17日、災害医療の軸足を、急性期から避難住民の健康管理に移すことを決意し、応援部隊を含めて呼び掛けました。

石巻圏合同救護チームを編成、自ら統括として約300ヶ所の避難所の支援を行い、9月末までつづきます。

活動には東北大学、日赤救護班、全国からの応援部隊の活躍と、地元で築いてきたネットワークが役立ちました。

石井は言います、「うちの病院が立派だったのではなく、全国から来てくれた医療チームや、企業、行政などあらゆる人が助けてくれた。日本も捨てたもんじやないと思いました。大災害はたまにしか起きない。我々の経験を共有して、今後の災害医療の財産にすることが恩返しであり、義務だと思っています」

○難病患者の災害支援

DMATは災害医療(外傷性)を担います。

難病患者の災害支援が、東日本大震災で十分に行えたかは疑問です。

阪神・淡路大震災では、災害直後の外傷性に対応する医療に続いて、感染症、精神疾患の必要性は確認され、対応されたかと思いますが、慢性疾患、特に難病支援についての話は無かったかと思います。

阪神・淡路大震災では、被災地域が東日本大震災に比して狭く、被災地外に搬送、脱出し、医療を受けることがスムーズであったかと思います。

透析患者さんについてお話しします。

透析は、大量の水と透析機により行います。

ライフラインの水、電気が無ければ行うことが出来ません。

しかも週に数回、数時間、透析しないと生命の維持が出来ません。

クリニックでは自家発電も無く、水の確保もままなりません。

仙台社会保険病院や石巻赤十字病院は自家発電も確保され、地域の透析患者を大量に受入れる事が出来、早期の域外大量搬送を免れました。

全ての地域で、もれなく透析患者の医療は行えたとは言えません。
また、避難所で多くの被災者に紛れて、声を出せなかった患者さんも居たと聞きます。
医療の確保できない地域では、DMATに搬送依頼するも断られたとも聞きます。
自腹で域外に脱出し、透析を受けた人もいたと聞きます。

災害では、外傷性受傷者だけでなく、絶えることの無い継続医療を必要とする難病患者も存在するのです。

災害医療、被災地医療は、外傷性の対応を中心に検討されてきましたが、被害の形態と医療難民のことなど、さまざまな状況を複合的に勘案した対応を迫られます。
今後はいろいろなことを勘案し、災害に合った支援方法を選択できるように検討されるでしょう。

○病院船など

第3章の自衛隊のところ、輸送艦に医療施設が備えられていると、お話ししました。
船は大量の物資等を搬送できますし、大勢の被災者を収容することも可能です。

自衛隊車両などの搬送には、民間のフェリーが使われました。
陸路が寸断されても、海路から大量に搬送が可能です。
しかし、災害時において、何時も民間船舶を有用に借り上げることができるのかは疑問であり、今後の課題です。

フェリーや客船では、船室などの宿泊施設が確保され、ある程度のプライバシーも確保されます。

ライフラインは自ら確保されるので、避難所での環境問題はクリアされます。
透析患者についても、対応が可能と考えられます。
しかし、これまた借り上げの問題が発生します。

ホテルシップ、ドクターシップ構想は進んでいるようです。

神戸大学 井上名誉教授は言います、「災害時にすばやく行政と民間が連携し、大型船を運用するモデルを、震災を経験した兵庫から発信したい」

実は、阪神・淡路大震災時にも船の有用性に気付き、病院船のことが取り上げられましたが、平時における維持費が問題となり、立ち消えています。

現在の海上自衛隊、海上保安庁の船舶にも医療施設を備えています、規模などを考えれば、効果的に使われていません。

政府は、平成23年度第3次補正予算で、医療機能などを持つ災害時多目的船の導入に向けた調査・検討費の計上と専門家による検討委員会を発足させました。

日本でも以前、病院船を有していた時代がありましたが、現在は有していません。

世界では、多くの国で運用されています。

病院船は海軍で運用されているようです。

一例を紹介します。

アメリカ海軍マーシー(69,360トン)、コンフォート(69,360トン)です。

1986年、1987年に就航しており、その主務は傷病兵に対する医療支援することであり、平時においては米政府の要請に基づき災害被災者や人道支援対象者に対して医療支援を行うことです。

手術はもとより、各種検査、レントゲン撮影も行えます。

そして、自艦にはヘリコプターが離着艦出来るうえ、大量の食事の提供も行なえます。

米国軍の各作戦には参加し、そして災害支援にも参加しています。

2005年1月のスマトラ島沖地震、同年9月のハリケーン・カトリーナ、そして、2010年1月のハイチ地震でも活躍しています。

現在、国防、憲法についてさまざまな議論、取り組みが行われています。
日本は戦争放棄を唱えています、専守防衛のための武力は保持するとして
います。

近々において、友好国が攻撃された際の武力行使が議論されています。

海上自衛隊には空母がありません。

それは専守防衛だからであり、戦闘機が遠方に行く必要が無い、よって
空母の必要は無いとのことからです。

でも、尖閣列島問題についても、空母を有していれば対応は大幅に
変わるでしょう。

平時は抑止力として運用し、災害時には空母が病院船として運用が可能かと思
います。

平成25年 台風30号被害によるフィリピン支援に、自衛隊は1000人規模の
派遣を行っています。

これに加えて、フィリピンのように、多くの島からなる国の支援には空母派遣は
有用だと思われます。

阪神・淡路大震災がきっかけの災害医療への取り組みが進み、

東日本大震災では、その方向性に一石が投げ込まれました。

災害時の医療は更に進歩します。

第12章 減災とは

減災とは、災害時に発生し得る被害を最小化する取り組みです。

防災が被害を出さない取り組みに対して、減災とはあらかじめ被害の発生を想定し、その被害を低減させていこうとするものです。

阪神・淡路大震災以降、避けられない、防ぎきれない被害があるなら、少しでも被害を少なくしようとする考え方が生まれました。

最も、一般の人に行き渡るようには、広がってないかと思えます。

災害における地域の弱点を発見し、対策を講ずるとして、行政だけでなく、地域の住民と協働で、地域の防災力の向上、防災街づくりを行います。

地域だけでなく、いろいろなところで、災害が発生した場合の対処方法を周知していることも、減災につながるものと思えます。

○釜石の奇跡

釜石市の小、中学校に通う生徒2926人(休んでいた5人を除く)は、誰一人として津波などの犠牲にはなりませんでした。

これは常日頃から、防災教育が徹底できていたからです。

「てんでんこ」

これは、「てんでばらばら」を意味し、子どもたちには、自分の命は自分で守れと教えています。

一人一人が自分の命を守ることで、周りの多くの命を救うのです。

これまで幾度も経験してきた災害から、学んださまざまな思いが「てんでんこ」に込められています。

今回の震災では、子どもを迎えに行ったり、親を待っていた中での犠牲者が多くいます。

釜石のように、子どもたちは自らの命を守るために、自ら避難しました。

このような教育、教訓を徹底することにより、犠牲者を少なくすることが出来ます。大川小学校のように多くの犠牲者を出さないためにも。

○岩手県遠野市

岩手県の内陸部にあります。

遠野も地震により、ライフラインなどに被害を受けました。

ただ、沿岸部のように壊滅的な被害ではなく、かつ、防災意識の徹底した市であったかと思えます。

数ある三陸での津波の教訓を生かし、いざ有事には沿岸部支援ができるように日頃から計画を立てていました。

今回の震災においても、沿岸部への支援はいち早く、釜石、大槌、大船渡、陸前高田…と、被災者支援派遣隊を送り出しています。

また、被災者の受入れも行っています。

花巻空港から30Kmくらい、人的、物的支援には格好な場所に位置しています。

このように東北では、内陸部の市町村が、沿岸部の被災市町村を支援します。

宮城県では、登米(とめ)市が南三陸町を支援しています。

災害を想定し、被害を少なく止めるための協力体制の減災のひとつです。

○日鉄住金建材仙台製造所

仙台港に近く位置し、70人あまりの従業員が敷地内の築山に避難しました。地震直後の避難から30分、40分経っても何も変化はありません。雪の舞う寒い季節、そのうち「家に帰りたい」、そんな声が上がります。でも、工場責任者は「命令だ」として帰宅を許しませんでした。1時間後、巨大津波に襲われるも、誰一人として被害者を出しませんでした。責任者の意思の裏には、東京の本社から携帯電話で得た情報があつたのです。

宮城県名取市閑上(ゆりあげ)地区では、防災無線が聞こえず、多くの人が亡くなりました。

「ここは大丈夫だろう」と思い込んで、避難しなかった人も多かつたらしい。地区には過去の津波被害を伝える石碑があつたが、年月の経過で災害意識が薄れてしまったのだろう。

情報の伝達もしかり、防災意識の徹底が減災につながります。

○たろう観光ホテル

鉄筋6階建て、岩手県宮古市田老地区にあります。津波で4階まで被害を受け、1階、2階は鉄筋をむき出しにしています。

田老地区には、海拔10mの防潮堤があり、津波防災の象徴として全国的に知られていました。

しかし、その防災シンボルをも軽々と津波は乗り越えて、田老地区に壊滅的な被害をもたらしました。

たろう観光ホテルのオーナーは、このホテルで記録した津波映像を訪れた人に見せ、話をしています。

濁流が町を破壊する不気味な音とともに、町が黒い波に飲み込まれていく生々しい様子が映し出されています。

被害を語り継ぐ、これもまた減災の手段だと思えます。

報道機関も今回の震災で、いろいろと考え直すことになりました。

正確な情報の有無が人命を左右する

大量の情報を発信しても、相手に伝わらなければ意味がない

何をどう伝えていけばいいのか？

宮城県の地元紙 河北新報では、震災前から減災報道に力を入れてきたものの、それが読者に十分伝わっていたのか疑問に感じているという。

報道のあり方が問われています。

最終章 今、なにをすべきか

東日本大震災から、もうすぐ3年を迎えます。
今改めて何をすべきか

天皇陛下の発言、行動は常に国民に寄り添ったものです。
被災地訪問においても、丁寧な黙祷、自ら膝を折っての慰労、
避難所で被災者が履物を履いていないのを確認すると、職員の勧めるスリッパを
お履きにならなかったという。

釜石市訪問でのお話です。
避難者が待つ釜石中学校に向かうマイクロバスの車中、沿道では住民がお迎えに
立ちます。

すると天皇陛下は、ご自身のお姿が住民によく見えるようにと揺れる車中で
立ち上がり、背もたれなどにつかまりながら手を振られました。

随行の釜石市長からの着席の勧めにも、「皆が出迎えてくれているので手を
振らなければなりません。だから、座らなくてもいいのですよ」とお応えされた。

天皇、皇后陛下のみならず、皇族方は支援を表します。

皇太子殿下

平成25年7月7日 東京で開催された学習院OB管弦楽団定期演奏会で、
皇太子殿下は、東日本大震災の流木や陸前高田市の奇跡の一本松を材料に
作られたビオラを演奏されました。

演奏会には天皇、皇后陛下と雅子さまも鑑賞されました。

このビオラは、バイオリン製作・修復者の中沢宗幸さんが作成し、この演奏会で
初めて使われたと言う。

同楽団、皇太子殿下へとつながるには、皇后陛下が橋渡しをされたという。

皇太子殿下は、このビオラでシューベルトの交響曲第7番「未完成」を演奏、
演奏後は客席に向かって、奇跡の一本松が描かれたビオラの裏面を披露されると、
一段と大きな拍手が起きたという。

1997年に起きた連続児童殺傷事件(神戸市)で亡くなった彩花(あやか)ちゃんの
母親、山下京子さんが新聞に寄せた手記に、被災者に対するメッセージがあります。

京子さんは娘さんを突然、猟気的な犯罪により失いました。

娘さんを亡くした生活に、過度のマスコミ報道、身体を壊したりで凄惨な生活を
余儀なくされました。

その生活のなかで、家族に支えられ、多くの人たちに支えられ、「今振り返れば
感謝の思いがこみ上げる」といいます。

「どんな困難に遭ったとしても、心の財(たから)だけは絶対に壊されない」

「この15年間、私たち家族は、日常の生活の中で揺れ動きながら、時に絶望して
泣きながらも目の前の壁に挑んできました。どんなに苦しくても、あきらめなければ
必ず笑顔と幸せを取り戻すことができる。心の財(たから)さえ壊されなければ、
人は再び、いえ、何度でも立ち上がることができる、ということを東日本大震災で
被災された人たちに身をもってお伝えします」

崖から転げ落とされ、奈落の底から這い上げられた京子さんの思いは、
東北で苦しむ人たちに対する心強いメッセージです。

復興特別法人税が26年3月に廃止されます。

復興財源は確保されているといいますが、今までの予算は適性に処理され
ましたか、予算は効果的に復興を後ろ押ししていますか!

福島第一原発事故は未だ、その方向性が定まっていません。
放射能被害により、岩手、宮城に比べて復興の遅れている福島現状。
岩手、宮城の瓦礫は26年3月末までに完了すると言われていたが、福島では、瓦礫の処理率は未だ59%です。

平成25年12月現在、震災発生1000日を迎えても、計画復興住宅の1.2%、560戸しか確保できていません。

自宅を離れて避難生活をしている人は約27万人、仮設住宅入居者はおよそ10万人です。

避難生活が長期になると、地元に戻れなくなってしまいます。

地元を離れた、見捨てたと思われる心苦しさの中で、家族の生活を確保しなければならないという心の葛藤を抱えた人も多くいます。

東北の人は辛抱強く、純朴で、連帯感があると聞きます。

戊辰戦争で、明治新政府に挑み、奥羽越列藩同盟を結成したように、被災3県をまわりの県が支えます。

きっと復興はなします、たとえ時間が掛かろうとも。

東日本大震災後、もうすぐ3年を迎えます。

今、なにができるのでしょうか、今後、なにをすべきなのでしょう？

ひとり一人が震災を忘れず、風化させないことが大切です。

そして、小さなことでも、自分にできることを行ってください。

東北の未来のために！

東北の復興を願って！

* 新聞記事等の無断盗用をお許しください

* 乱筆乱文、誤字脱字はお許し下さい